

林復斎「よかろう一戦交えようか」ペリーを黙らせた男



VS



みなさんお待たせしました！超久しぶりの歴史通信です。最近忙しくて全く書けていなかったのですが、母の誕生日なので、青木歴史通信の熱烈なファンの皆様のために筆をとりました。ちなみにファンはうちの父母と他数名しかいないのですが、、、(笑)

今回紹介する人物は林復斎です！えっ？だれ？と思ったあなた！あのアメリカ東インド艦隊の提督ペリーを黙らせた男ですよ！「ペリー来航」って聞いたことありますよね！1853年を文字って「いやでござるペリー殿」と覚えた受験生も多いのではないのでしょうか？江戸時代の末期、鎖国(正確には海禁)をしていた日本には度々欧米人が交易をせまり来航してきました。しかし幕府は1825年に異国船打払令を出すなど、断固たる姿勢でこれを追い払っていました。しかし、欧米の実力を徐々に理解してきた幕府はこれを1842年に廃止し、薪水給与令を出します。簡単に言えば「無差別に大砲ぶっ放して強い欧米と戦争になったらまずいから、燃料(薪)と食料(水)をあげて穏便に帰ってもらいなさい令」です。しかし、それによって外国とうまくバランスをとっていた幕府の予想を遥かに超える出来事が起こります。それが「ペリー来航」です。江戸の目と鼻の先である東京湾に面する浦賀にアメリカ艦隊が見たこともない巨大な鉄でできた軍艦4隻(内蒸気船 2 隻)で侵入してきたのです。そして武力を背景に幕府に交渉要求を突きつけてきたのです。当時の民衆の驚きは相当なものでした。しかし、老中首座の阿部正弘が陣頭指揮を執り何とかペリー一行を帰させます。しかし、「1年後もう一度来る、その時の返事が NO だったときは・・・」といった雰囲気を出して空砲を撃ち、江戸湾をさらに奥まで入り、威嚇してから帰って行きました。

そして翌1854年再度ペリーは日本にやってきます。しかも1年後と言っていたのに、なんと約半年後に訪れます。ペリーは本当自分勝手な強引な男だと思いませんか？女性にモテないタイプですね(笑)。しかも最終的に計9隻の軍艦を並べます。つまり本気でおどしにかかってきました！その交渉で日本の全権を任されたのが、我らがヒーロー林復斎だったのです。

アメリカ代表 ペリー VS 日本代表 林復斎 です

さて先制攻撃をしてきたのはもちろんペリーです。ペリーは開口一番「アメリカの要求を飲まなければ戦争するぞ～今日本近海にアメリカの軍艦が50隻ある。さらにカリフォルニアに50隻待機させている。計100隻は20日以内に到着できるんだぞ～」と言い、さらに空砲をボンボン撃ち、強烈な爆音で林復斎をおどしにかかります。しかし、林復斎の返答は「戦(いくさ)とあらばやむをえぬ。よかろう貴国と一戦交えるしかあるまい」というものでした。ペリーは「あれ・・・？」となります。百戦錬磨のペリー提督はこういったおどしをすれば、アジアの国々では相手がびっくりして何でも要求を飲むという経験とイメージがありました。だからペリーは完全に「ホワッツ？」状態でした。さらに軍艦の空砲の爆音が轟く中、目の前に座る林復斎はピクリともせず、心地よい音楽でも聴いているような様子です。まさに「ホワイジャパニーズピープル？」ですよ(笑)。

林復斎とは何者なのか？「武士」です。今まで歴史通信を読んでこられた読者の皆様なら「あ～武士か。ならそうなるわな」と納得してもらえるのではないのでしょうか。武士とは世界に類を見ない強烈な精神を持った種族ですから仕方ないですよ（笑）。しかも林復斎は武士でありながら、学者でもあります。大学頭です。いわゆる天才です。林復斎はこの交渉にのぞむ前に周到な準備をしていました。アメリカの国情やペリー艦隊の状況を事細かく調べていました。もし戦争になったとしても、アメリカから軍艦が来るには数ヶ月かかるため、水と食料、そして燃料はすぐに尽き、持久戦は不可能である。つまり、せいぜい大砲をちょっと撃ってすぐに退散するのが関の山であると理解していました。さらに、日本には戦闘民族武士がいますからね（笑）。よく幕末の武士は260年の泰平の世で生ぬるく育ったため、全然だめだったという人がいますが、この後の戊辰戦争や日清戦争・日露戦争を見れば、武士をはじめ、日本人がいかに勇敢であるかが分かりますよね。

話を戻します。一瞬、頭が真っ白になったペリーですが、主導権を林復斎に取られてはならないと、違う手で応戦しようがんばります。

ペリー「江戸幕府は異国船打払令によって罪のない多くの外国人を不当に扱っている！」

林「異国船打払令は1842年に廃止したが知らぬのか？」

ペリー「しかし1848年にラゴダ号事件で外国人を牢屋に入れたらどう！」

林「あの者が日本で狼藉を働いたから牢屋に入れたのだ。貴国では犯罪者は捕まえぬのか？」

ペリー「遭難した外国船を助けないのはおかしい！遭難船が薪や水を補給できる人命救助のための港を開け！」

林「1842年に薪水給与令を出して、薪や水は渡しておる」

ペリー「でも長崎しか寄れる港がないだろ！最低でも7～8ヶ所は開港しろ！」

林「薪や水を渡すくらいならそんなにはいらぬだろう。せいぜい下田と函館で十分であろう」

ペリー「もっとたくさん開港して、アメリカと貿易しろ！」

林「先ほど人名救助のために薪と水を渡す港が欲しいと言ったではあるまいか。あれはウソであったのか？」

ペリー「じゃあ港から10里（1里＝約3.9km）まで自由にアメリカ人が行動できるようにしろ！」

林「下田に関しては7里まで、函館に関しては5里まで許す」

（※下田港から7里地点に天城山脈があるので外国人の侵入をそれ以上できないように林は7里と限定）

と言った具合で一度も主導権を渡さず林は日米和親条約を結びました。ここで気づいて欲しい林の交渉術のすごさはペリーが何も手柄を立てずにアメリカに帰ることができないということを理解した上で、下田と函館の開港を約束したことです。もし全てを却下した場合、ペリーは次の手段を考えて行動するはずです。つまり、いつまで経っても帰らず、場合によっては散発的な戦闘になる可能性もあります。だから、ペリーがアメリカ大統領に報告できる手柄として下田・函館の開港を認めます。しかし、下田・函館の開港は薪水の給与のみであり、幕府はすでに薪水給与令を出しているため、別に何も変わったことはないのです。さらにアメリカ人の行動範囲を下田7里と函館5里に限定させたことで、山脈と海に囲まれた場所であるため地理的にも幕府や朝廷の脅威にならないのです。林復斎天才！と思いませんか？こうして林復斎は日本に訪れた未曾有の危機を救ったのでした。

ちなみに後日談ですが、林復斎のもう一つすごいエピソードを紹介します。実はペリーは最後帰るときに林に「もし今後日本がイギリスやフランスなどと戦争になった場合、アメリカは軍艦を率いて日本を助けにくる」と言っています。つまり、ペリーは林の事が大好きになってしまったのです。人と意見を違えたとき、相手を論破する頭の回転の速い人は世の中にたくさんいます。しかし、相手を論破した上で、相手から尊敬と友情を勝ち取れる人は極一部だと思います。みなさんも林復斎のように、しっかりと自分の主張をするために事前に周到に準備をした上で、論理的な話を展開し、さらに相手に好感を持ってもらえる人柄や力を身につけましょう！

さらに後日談ですが、ペリーは日本人を驚かすために当時の文明の利器であるミニ蒸気機関車をプレゼントしています。自分で勝手に走る蒸気機関車を見た日本人は驚きますが、わずか半年後に日本人は蒸気機関車をつくっちゃいました。それを聞いたペリーはびっくり仰天です。さらにこの後、黒船と呼ばれ、日本人を恐怖させた蒸気船も作っちゃいます。日本の文化や精神、そして教育水準の高さに触れたペリーの手記にはこう書かれています。「日本人が一度文明世界の過去および現在の技能を所有したならば強力なライバルとして、将来の機械工業の成功を目指す競争相手となるだろう。」ペリーの見る目もまた確かでしたね。